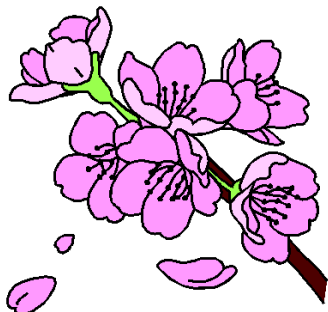


TNBだより



令和6年3月号



令和5年度もあつかわずかとなりましたが、新型コロナウイルス感染症の対応で臨時休校を全国一斉に要請されたのは、今からちょうど4年前でした。この間、学校でも様々な影響や変化が起こっているように思います。on line が導入され、ICT 活用の取組が進みました。行事や学習活動のあり方が見直されました。全体的に行儀の良い集団が多くなる一方で、心のコントロールや人との関わりが不得手で社会性が未熟な子どもの問題が増えてきました。

こうした時代の変化に対応しながら、子どもたちの成長や笑顔を大切に考え、教育活動に取り組んでこられた先生方に深く敬意を表します。この1年間の皆様のご尽力は、新しい時代を生きる多くの人の歩みに力強く活かされると思います。



さて令和5年度 TNB だよりの最終号は、本年度末で校長職を退かれる方から4名の先生にお願いして、永年携わってこられた教職への思いを伝えていただきました。子どもたちの育成に貢献してこられた功労を讃えつつ、ご紹介いたします。

菊作りは人育て

丹波篠山市立今田小学校長 野々口竜己

昭和61年5月の採用から38年間。教諭として3校で16年、丹波教育事務所・篠山市教育委員会で12年、校長として丹波市・川西市勤務も含め5校で10年勤務させていただきました。その間、多くの出会いと学びがあり、今につながっています。

学んだことのひとつが、教諭時代に経験したお苗菊栽培です。お苗菊とは、江戸時代に青山藩が幕府から拝領し篠山特有の菊として栽培されてきた菊のことです。当時、菊作りのことは何も知りませんでした。が、先輩に教えていただきながら子どもたちとお苗菊栽培に取り組みました。

そのとき教えてもらったのが「菊作りは人育てと一緒に」という言葉です。

毎日水やりをして、定期的に肥料をやれば、お苗菊は大きくなっていきます。けれども、水やりや施肥が十分でないとなかなか大きくなりません。

また、お苗菊は、垂直に立てた支柱に茎を沿わせながら育てるのですが、品種によっては、上にではなく、横に横に伸びようとするものがあります。茎の伸び加減を見ながら、ちょうどよいときに支柱に沿わせてやる必要があります。そうすることで、横に伸びがちな品種もまっすぐに育てることができます。

菊は、こまめにお世話をすることによって立ち姿の整った、立派な花を咲かせることができます。半年間育てた菊が花を咲かせたときの子どもたちの表情はとてもうれしそうです。

毎日の水やりや定期的な肥料やりは「毎日、細やかに関わること」、ちょうどよい時期を見計らって支柱に沿わせることは「状況を見て、ちょうどよい時期に必要な支援をすること」に通じます。子ども一人一人に日々丁寧に関わっていくことで、子どもが本来持っている力を伸ばすことができます。お苗菊づくりを通して学んだ、日々丁寧に人と関わることを大切にしようという思いは、今も自分の中で生きています。

教諭として、教育委員会職員として、校長として様々なところで勤務させていただいたことで、多くの子どもたちや子どもたちを取り巻く方々とお出会いすることができました。出会いを通して多くのことを学ばせていただきました。お出会いした全ての方々に感謝です。ありがとうございました。

教職生活を振り返って

丹波市立黒井小学校長 谷口千尋

教職生活を終えるにあたり、私は幸運だったかと振り返りました。「福や運を論ずるのはあまり高等ではないように思われるが、人が一所懸命努力したり苦労したりするのは福を得るためなのだから、福について考えるのは悪いことではない」幸田露伴の言葉です。

著書の中で「幸福三説」を説いています。それは「惜福」「分福」「植福」の三つです。ひとつめは、「惜福」です。自分に頂いている福は、与えられているものだと考えて、与えられた福を、使い尽くしてしまわずに、天に預けておくということです。よく「運をのこしておく」とか「運を使い切ってしまった」と言いますが、このようなことと似ています。幸運が訪れても謙虚に、不運となっても希望を持ってといったところでしょうか。仏教の教えに「苦楽半々」と言う言葉もあります。謙虚にと言うところは、教職生活を通じて、様々な方から教えていただいたところです。

二つめは、「分福」です。幸福を人に分け与えること。自分ひとりの幸福はありえない、周囲を幸福にすることが、自らの幸福につながると書かれています。「福分け」ということをしたことがあります。小学生のころ厄神祭の福引で、当時、高価だった「電気掃除機」(たぶん3等賞)を引き当てました。その時に祖母が「福分け」と言って文房具(ノート)を買ってきて近所の子どもに配っていました。「すべて人世の事は時計の振子のようなもので、右へ動かした丈は左へ動き、左に動いた丈は右に動くもの、自分から福を分ち与えれば人もまた自分に福を分ち与えるものだ」と書かれています。子どもたちからも有形無形の福をたくさん分けてもらった気がします。

最後は、「植福」です。読んで字のごとく、これから幸せであり続けるように、今から幸福の種を蒔いておくことです。「明日、世界が終ろうと、私は、リンゴの木を植える」はよく聞く言葉です。教育の営みは正にこれだと感じています。「過去を書き替えることはできないが、今から良い種を蒔き続ければ、望ましい未来につなげることができる」と書かれています。

教職を通じて、様々な人から、様々なことを学ぶことができました。人生の節目、これから「どう生きるか」を「惜福」「分福」「植福」が教えてくれているように思います。

38年間の教師生活を振り返って（大きな転換期と部活動指導を通して）

丹波篠山市立西紀中学校長 井上敏昭

昭和61年に伊丹市で採用となり5年、丹波篠山市では篠山養護学校7年、中学校教諭・主幹教諭として15年、教頭5年、そして校長として宝塚市4年と丹波篠山市で2年務め、38年間の教職生活を終えることになりました。特に篠山養護学校での勤務経験は、教職生活に大きく影響を受けた時期でした。新任の頃は、教師風を吹かせ、学校行事の表彰状を独占するために必死になっていました。先輩からは、自分のクラスのことだけを考えるな。学年の先生であり、学校の先生であると、叱咤激励されたものでした。当然、女子生徒からは反発されたものでした。その頃、篠山養護学校での勤務が始まりました。これまでは、一方的に正義を押しつけ、出来て当たり前という気持ちで指導をしていたのだと思います。生徒一人一人の特性を理解し、行動背景を考え、教育をしていくことの大切さを学んだ時期でした。それ以降は、生徒との関係において苦労することはなくなりました。

中学校勤務では、教頭になってからも部活動指導に力を注ぎました。陸上競技とソフトボールを担当し、競技者であるからには、全国大会を視野に入れた指導をしました。その中で大切にすることは、誰からも応援してもらえる部活動を目指すことでした。そのために、生徒会やボランティア活動は積極的に取り組ませました。更に、生徒の模範となるように学校で一番挨拶のできる部を目指しました。そして、本気にさせる仕掛けをしてきました。その結果が、2競技とも全国大会出場につながったのだと思っています。

私は教師には向いていないのではないかと迷いながらの教職生活でしたが、教職員のみなさんや生徒たちなど、出会いに恵まれてここまで続けることができました。人と関わることはとても楽しいと思える38年間でもありました。とても楽しく、充実した教職人生でした。多くのみなさまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

38年間を振り返って

丹波市立柏原中学校長 小林宏明

令和5年4月、何となく最後の1年を意識しましたが、今までと同じように38年目の最後の1年を過ごしてきました。今、振り返ると昭和61年4月に兵庫県の教員として採用されて以来、たくさん子どもたちや保護者、教職員や教育行政の方、そして地域のみなさんとの出会いとそこでの学びが、自分を成長させてくれたと感謝しています。

20代・30代の若いころは、教科指導や学級経営、学校行事や部活動にがむしゃらに取り組んでいたように思います。そして迎えた40代で初めて、特別支援学級の担任をしました。当初の私は、すぐに生徒の短所が目についてしまい、短所を克服するための指摘や指導をしました。しかし、担任としての日々の教育活動や研修会参加、生徒との関わり合いによって、長所を伸ばす指導・支援が大切であるということに気づかされました。すべての生徒に長所や特性があります。そして、成長したら大人になりますが、みんな同じ大人になるわけではありません。一人一人違い、「普通の大人」としてすべての人をくくることはできないということに気づきました。

また、管理職になって、西脇市の中学校や朝来市の小学校に赴任したことも自分を成長させてくれたと思います。特に朝来市立山口小学校に勤務した2年間は大きく成長できました。初めての小学校で、1年生から6年生までの発達段階の違いに驚かされ、全校集会ではどの学年を中心にして、どんな話をしたらよいのか戸惑いも大きかったです。このような2年間の中で、兵庫県教育委員会の研究指定を受けた「9年間を通したキャリア教育の充実事業」で、キャリア教育を研究推進したことに大きな学びがありました。それは、一人一人の社会的・職業的自立に向けた能力や態度を育てることが大切であると思うようになったことです。生徒の将来の夢や目標を大切にしつつも、ともすれば目先の進路指導だけに目を奪われがちですが、将来の社会的自立が一番大切であると気づかされました。

最後の赴任校となった柏原中学校では、この2つのことを大切にして学校経営を推進してきました。心の通い合う職場づくりを心がけ、生徒の将来の自立を目指した教育を最後まで推進したいと思っています。

最後になりましたが、今まで繋がりお世話になったすべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

大変ご多用の折にもかかわらず、ご執筆いただきありがとうございました。永年に渡り子どもたちのため、学校のためにと、教育活動にご尽力されましたことに深く感謝申し上げます。



本年度、学校問題サポートチームは、少しでも学校や先生方のお力になればという思いで支援活動をしてきました。各校の皆様、両市教育委員会の皆様には、学校訪問や研修会等に際し様々なご配慮をいただき、ありがとうございました。

各学校で伺った取組や課題については、その都度、教育・警察・福祉・臨床心理の視点をもって、サポートチームでアセスメントをしてきました。多くの学校に共通している課題があります。役立つと思われる実践例や課題解決のヒントになると思われることを、研修会やTNB だより等で少しずつお知らせしてきました。何か1つでも先生方のお役に立てておれらうれしく思います。

学校に関わるすべての皆様が元気で健やかでありますようにと、チーム一同願っております。



梅田（教員 OB） 中道（教員 OB） 婦木（教員 OB） 足立恵（教員 OB） 田村（警察 OB） 谷口（SSW） 富永（SC）